大正十三年十一月二十日第三種郵便物認可
大正十四年五月三十一日印刷納本・大正十四年六月一日發行

婦人と勞働

六月號

職業婦人社發行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

奥うめお氏著

婦人問題十六講

思想・文藝講話叢書（9）

◆四六判最上製
◆價貳圓五拾錢
◆郵送料拾貳錢

婦人問題　これ實に、社會問題と共に、我等が世紀當面の大問題である、今や我等の生活は、近代文明の必然的歸結として、あらゆる方面の一大改造機、一大轉換期に到達してゐる。此時に際し、婦人問題の解決が最も重要なる一使命なるは云ふ迄も無く婦人問題は寧ろ社會問題以上に、根柢的な意味を有つてある。社會問題の高唱と共に、今や婦人問題を說く者頗る多いが、而もこれについて、その妥當なる基本知識を授くるに足る啓蒙的の書は甚だ少ない。小社乃ち、婦人問題の權威者たる奥女史に請うて此書を公にした。單なる泰西學說の飜譯紹介にあらず、著者が苦心の餘に得たる各種の材料に基き、精密なる統計に立脚しつゝ、婦人問題の萬般について、何人も讀んで直に了解し得るの深切周到なる講話をなせるもの。最も時を得た出版である事を信ずる。

―十六講要目―

▼第一講、歷史上の婦人の地位▼第二講、婦人問題の意義及び發生▼第三講、宗教と婦人▼第四講、文藝上の婦人問題▼第五講、女性中心說▼第六講、女權主義の主張▼第七講、エレンケイの母性主義▼第八講、新マルサス主義と產兒調節▼第九講、兩性研究に現はれたる婦人觀▼第十講　法律上に於ける婦人の地位▼第十一講、勞農露西亞の婦人▼第十二講、婦人參政權運動▼第十三講、母性及び兒童保護問題▼第十四講、社會主義と婦人▼第十五講、婦人勞働問題▼第十六講、婦人問題と我が婦人界の現狀

東京牛込矢來三番地
振替東京一七四二番

新潮社

電話牛込（八〇八・六〇八）（八〇八・七〇八）

第三卷第五號

婦人と勞働

十六年四月號

卷頭言……(一)

□寂き朝に(詩)……下村悦夫(二)

□九州の旅の印象……奥むめお(四)

□新しき日の女へ……室伏高信(一〇)

□職業婦人よ、起たう……おく(一三)

□ヘボ新聞の記事笑殺のこと……松本貞子(一三)

□『實に口惜しいですね』……山崎嶮路(一四)

□報酬のこと 創作……生田花世(二〇)

編輯室にて……(三一)

◇私の宗教……小笠原譽至雄(一九)

◇ブロへの福音 榮養パンに就て……宮本冬ゝ(三三)

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

婦人と労働

私は旅に來て、今更のやうに、輝くばかりの新緑のゆらぎに目をとめて思ひました。隨分とあわたゞしい營みに、長い間、おはれ追はれて驅けずつてゐたことのおかしさ。大自然の運行のまへに、ものゝ數でもないひと一人の私のはたらきが、それが一体何であらうと。耳をすまして聽くと、風さへ、音をたてゝ吹いてゆくやうです。

『然し乍ら』

　然し乍ら、私はかう云つて、強く〳〵私の首を左右に振つて立上らないではゐられないのです『そらの色さへ仰ぎみる暇もなく』あくせくと生活におはれてゐる私の多くの友人たちの上を思ふとき、よし、私一人のはたらきがどんなに、ものゝ數でもないにしろ、一人より二人、二人より十人、十人よりは百人と、全ての力を一にして起き上るとき、それは、如何に大きな力として世にはたらきかけることが出來るかを、信ずるからであります。

（佐賀にて）

寂しき朝に

下村悦夫

銀いろの糸音もなく垂るるが如く、
しめやかに微雨けむる蒼き朝なり。

汝らは母子(おやこ)ふたり睦じく、
旅なるわれの噂などしつ、
つゝましく朝餉(あさげ)の膳に向ふならむ。
膳の上に並びたるは、
凱旋の桃太郎を描(えが)ける小さき茶碗、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

薄と桔梗とを染め出したる大き茶碗、
薄むらさきの茄子の漬物を盛れる皿、
柔らかく湯氣を上ぐる二つの湯呑碗。
汝らは母子ふたり睦じく、
さゝやかなる朝餉の膳に向ふならむ。

目閉づれば　幻に浮び出づ　かの二階、
蒼暗き千穗ヶ嶺の聳え眉に迫る
かの町の　小さき二階――よ。

銀いろの微雨　おとも無く打ちけむりて、
いづこともなく
千鳥の聲聞え來る寂しき朝なり……

旅の印象

奥むめお

これから、九州の旅の印象記を書きます。

× ×

旅は、ずい分あわたゞしいものでした。豫定の日程表を見たとき、大分驅け足だな、と思ひましたが、事實は、それ以上の驅け足であつたのです。(これには、豫定以外に、私一人が八幡市の市議戰に民勞黨の候補者の應援演說に二度も引つ張り出されたこと、唐津にある友人から招かれて、熊本から逆戻りして、唐津の會にも出席したこと等が理由の一半を占めてゐたとも云へるのですが)

私は賣れない雜誌『婦人と勞働』の經營に腐心してゐる。この私が、よく賣れる雜誌『主婦の友』の、愈々賣らん哉の宣傳隊にひきまわされて、こんなにもせわしい目をして汽車に乘つたり、自動車にのつたりして走つてゐるのだと思ふと、人生つて、隨分皮肉だなと、ともすれば、憂鬱の谷にすべり込みさうになるのでした。

私は一たい、新しい土地に杖をついて、方々見物してまわるといふことに興味を持

たない。然し、未知の土地に行つて、一人淋しく、靜かに、平生、がむしやらにかけまわしてゐる自分の心身に休息を與へることは大好きです。未知の地に行つて、未知の人の前に自分の仕事のプロバカンダをやるほど、私の氣持は、快恬でない。

× ×

無名の友人から屆けられた博多人形。

福岡で、朝から杏坊の手をひいて（私の淋しがりやが、子供なんかつれて行つたものですから、同行のみなさんに隨分御迷惑をかけました）縣廳前の廣場のあたりを散歩して、歸つて來ると、見知らぬ方から立派な博多人形が手紙に添へて屆けられてあるのを貰ひました。心づくしの小箱まで添へて。

どなたでせう。かくれたところから、こんなにまでして私のことを思つてゐて下さるお友達は。然し、氣の強い人らしいのね。私に顏も見せず、聲も聞かせないで、風の如くに去つてしまつた私のお友だち！

× ×

白髮を拔いて貰つたこと。

久留米の宿は、ちよつとお寺の方丈みたいな、また、私の鄕里福井あたりでみるやうな庭の構への落ちついた家でした。初めて、しんみりと在京の友人にたよりを書

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

いたりなどしました。鏡臺に向つて髪を梳いてゐるとき、私は、ほんとうに久々で自分の顔をみるやうな思ひがしました。

その時です。右の鬢のところに何本かの白髪がふけつぽく光つてゐるのを見たのは同行の伊藤さんは、

『奥女史の白髪を拔くなんて、僕の一代記に特筆すべき光榮事ですなあ』

なんて、ブツ／＼皮肉りながらシャン／＼した黒髪を引つこ拔いて痛がらせるのでした。

それから久留米で、大坪徳郎氏の御案内で、大井新太郎一座の何やらいふ連鎖劇をみて來ました。平生、こゝろ持の上に餘裕がなくて、私は、獨身でのらくらしてゐた時代にはよく行つた寄席や活動や芝居やえ、六七年も行つたことがないので、妙にセンチメンタルになりました。

× ×

久留米と大牟田と別府とは、會場が高等女學校の講堂でした。別府では校長氏はみえなかつたやうでしたが、大牟田と久留米との校長氏は、私たちが何を饒舌り出すか、と、餘程心配してゐられたやうすでした。かういふ人達に、新潮社から今度出版した、私の著『婦人問題十六講』でも座右にすゝめたらどうかしら。何故婦人問

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

題が起つたか、何故、私たちがかうして貧しい生活にをはれ乍らも、婦人運動のために少しでも働かないではゐられないか。私は思ふ。娘も、母親も、妻も、姉も妹も、みんなの婦人が、その學校から、臺所から、事務所から、工場から、教會からおの／＼の立場から、この婦人解放運動に參加しなくてはいけないのだと。

かう、抽象的に婦人運動などといふと、何だか、棕梠箒のさきのすり切れたやうな髮をした女が、血走つた眼をして怒鳴り立てゝゐるやうにも考へられるのかもしれないけれど、それは決してそうではありません。たゞ、婦人が、その地位を、本來のすがた、正しいほんとうの立場にまでひき戻さうとする運動にすぎないのです。現在ある婦人の姿は、地位は、境遇は、家の道具、男性の方便、奴隸としてのそれにすぎないのですから。方便としてのそれではない、ほんとうの、女自身の地位に立返る運動です。

社會の半數を占める婦人が、長い間、方便として使はれる奴隸の生活を續けてゐた、といふことは、何といふ驚くべき事實であつたでせう。

久留米も大牟田も、話のすんだあと、校長氏はどちらも大層御きげんよく私たちを送出して下さいました。私は、校長氏よりは、私たちに、より近しい氣持を持つて現在に生きてゐる（に違いない）若い女學生たちの上に、勇敢なれ、と、口の中で

叫んで別れて來ました。

×　×

然し、私はつく〲思ひましたよ。やつぱり閑地だな。と。聽衆――とふよりは觀衆の方が多かつたかも知れない――の眼の、あのおだやかさ。やつぱり、現在社會のはげしい波風が、こゝまで吹いて來るまでには大分ごいでゐるのでせうね。それだけ生活が安泰であるのではありませうが。それは女の場合に就いて、一層さう云ひ得るのだと私は思ひました。由來女は、父母の保護に包まれ、夫の庇護に身を倚せて生きて來たのですもの。始終私が、自分の仲間として見出してゐるやうなまはりの人たちの、あの生々と開閉する眼は、あれはその人たちの生活から知らず〲していつのまにかあゝなつてしまつたものであるからです。

云ふまでもなく、それは、いゝことか惡いことかといふ問題とは、交渉のない事實であるのです。

×　×

九州を一周して、何千人の前に駄辯を費して來たかを私は知らないけれ共、旅役者のむれのやうに、呑氣にはしやぎ乍ら、次から次へと通りすがりに饒舌つて來て――とは云ひ乍ら、どうかしてこの人たちに、生活といふものに就いて、瞬間的に

でもいゝから一度考へてみて貰いたい、といふことに、私はいつも本氣であつた、と敢て云はう――私の印象は混沌として、割合に淡い。

かういふ旅に嬉しいものは、訪ねて來てもらつたり、訪ねたり、挨拶を交したり議論をしたりした人たちとの間に持つた幾時間であります。思ひ浮べる長崎造船所社宅の宮崎健ちやん、小倉の幼兒園の黑田先生夫妻、唐津の澁田見とよ子さん、鹿兒島の江坂ふみ氏、七高の學生研究會の誰れかれ、等々。

殊に、小倉で訪ねて來て下さつた田淵あい子氏は新婦人協會當時の熱心な、かくれたる後援者であり、同志であつた人、唐津では、私の學生時代の友人原きくの氏が幸福な家庭を作つて、唐津灣を臨んで靜かに家を構へて、一方女學校の創立事業に夫妻で腐心してゐられます。

× ×

書きたいことの半分も書かない內に豫定の頁はなくなつてしまひました。

新しき日の女へ

室伏高信

家庭とは、女の領土であると云ふ如き一つの謬想が、一般に行はれて來た。妻は家庭の主人であるが如くに、一般に云ひなされて來た。ボオカス・ボオカスである。女性の奴隷道德を培養するための　一つのボオカス・ボオカスであるにしか過ぎないのである。

家庭は男の領土である。男のための領土である。男によつての領土である。この領土のうちにあつて、女性は完全に征服されたのである。まことに「强き家庭、弱き女」である。强き家庭の數千年の間に、「弱き女」が第二の天性にまで造りあげられたのである。

男は働かねばならぬ。そして女は泣かねばならぬ。文明の數千年の間、男は働き、そして女は泣いて來た。あらゆる意味に於て男は働き、あらゆる意味に於て女は泣いてきたのである。彼女は男のために泣き、子供のために泣き、そして彼女自身のために泣いてきた。「三つのカア」の世界にあつて、彼女は涙によつて繫がれてきたのである。

まことに「三つのカア」である。彼女の生活は「三つのカア」の生活である。Küche, kinder, kirche

━臺所、子供、教會である。彼女の世界は臺所子供、教會のそれである。若くは更にKartoffel, Knödel. Kaffee━━馬鈴薯、團子、珈琲の世界である。臺所、子供、教會の間に身をかゞめながら馬鈴薯、團子、珈琲を友として、數千年の女性生活が過ぎて來たのである。

　さればギリシアの詩人は女を嘲つていふた、結婚はたゞ二つの樂しい日を示してくれる。男が彼の胸に最初に女を抱きしめた日と、そして彼女を墓に埋めた日。━━ロオマにおいても、女はたゞ「寢臺と墓とに於て」のみ、善きものであるとさへいはれたのである。

寢臺と墓とにおいてのみ女は人として認められてきた。寢臺と墓との外において、彼女に與へられた世界は、臺所、子供、教會のそれのみであつた。結婚した女、家庭の女に對して與へられた一切のものは、臺所、子供、教會、馬鈴薯、團子珈琲である。そして彼女に許された最高の價、まこと詩人によつて彼女に與へられたところの最高の價は、『寢臺と墓』とであつたのである。

　ミユウラア、リイアに從へば、戀愛の歷史は、今日までに三つの時代を經驗してきた。一つは原始的戀愛の時代である。二つは家族制度の時代である。三つは人格的戀愛の時代である。そして今日は第三の時代、即ち人格的戀愛の時代に移つたのであると。

　家族制度の時代が過ぎ去つたことは、今日は最早や何人もこれを拒むことは出來ないであらう。拒むと拒まざるとにかゝはらず、時代は一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

度行いてまた歸ることをしないのである。「寝臺と墓」とはロオマの詩人を殘して「二つの樂しい日」はギリシアの詩人を殘して、一度行いてまた歸ることをしないのである。まことに永遠回歸の歷史の流れによつて、一つの時代が去りつゝあることは、他の一つの時代が、それの空所を滿たしつゝあることを意味するにほかならないのである。

今日は、女に與へられてきた一切の拘束を去らなければならないばかりでない。女に與へられた一切の讚美——過去に於て與へられてきた一切の讚美でさへも、悉くこれを男に返還しなくてはならないのである。何故なら、それらの讚美でさへも、女を自己目的として考へたものではないからである。

でからざる女は自巳目的である。凡ての人間が然らざるが如くに、女もまた自巳目的でなければならぬ、如何なるものゝ手段でもない。如何なるものへの奉仕者でもない。それ自身目的である。それ自身への奉仕者である。從ひてまた神への奉仕者である。こゝに神の尊嚴がある。シラアのいはゆる『女の尊嚴』はこゝに、そしてたゞ、こゝにのみ存在しえられるのである。

新著『女性の創造』より

職業婦人よ、起たう

ずい分ひどい不景氣だ。はじめの約束通りの月給を支拂はない雇主、何度にも分けてちび／＼となし崩しに支拂ふ雇主全然支拂はなくて、然もその内キッとまとめて拂ふといふやうな素振りで釣つておいて、二た月なり三月なりその人たちにタダ働きをさせてしまつてから、結局泣寢りといふ風にドロンをきめ込む雇主馘るぞといふ威嚇を露骨にしておいて、だん／＼勞働條件を惡くしてゆく雇主、その他いろ／＼。近頃職業婦人の足場は實に、波に漂ふ浮草のやうなもの、それに就職口と云つたら、こゝ當分は見込があるまいといふ程の逼塞振りである。

男子の失業者が四拾万人、智識階級者の方が一層ひどいのであるから、そのあぶれを喰つて困つてゐる婦人だつて幾萬人かが泣いてゐるわけであらう。

それに就いても私は思ふ。かねて弱いものとされてゐた女のこと、一人びとりにしてみれば一層弱い。その、女の弱いところにつけ込んで幾多の暴虐を敢てするのが今の雇主根性である。

この暴虐の雇主に對して正當な自分の主張をかたく持つて、自分たち職業婦人の立場を擁護するために、今や全ての女が結束しなくてはならないのだ、と。私たちの持つてゐるたつた一つの武器は、多くのものが一つになつて叫びをあげ、以て廣く社會の輿論を起すことである。多數の偉力を以て、目的を貫徹するまで突喊することである。

今や職業婦人は非常な危機に立つてゐる。女が職業につくと、女らしさがうせる、と云つて反對をする人が今でも可なり多いが、職業に就くといふことが、今の社會狀態で、いやでも應でも、やむをえぬ必然である以上、社會は何故、職業婦人からいはゆる女らしさを奪ひ去られねばおかぬやうな、今日斯くの如く劣惡な勞働條件で女を働かせてゐるのかと反問したいのである。

然し、こんなことを、漠然と社會に向つて抗議申込んだところで仕方がない。全ては職業婦人自身が、さうだ、と奮起しない限りは。

ヘボ新聞の記事笑殺のこと

あなたが、東京毎夕新聞の中傷記事に就いて見榮でもなく、やせ我慢でもなしに笑つて濟してゐられるのを見て、反つてヤツキとなつてあなたのために辯護して歩いてゐた自分がをかしくなりました。實際あゝいふ下劣な根性の記者を相手に角力をとつても初まらないわね。あなたに一度でも會つた程の人は、勿論あんな記事を信じませんわ。私はこの上共に、あなたが自重して、わが婦人界のためにお働き下さるやう念じます。（松本貞子）

慰めたり、勵ましたり、かと思とあの記事をその儘信じて罵倒したり、のいろんな手紙を頂いて恐縮してゐます。あはれな職業男子の、何かの必要に迫られての筆のあや（少し下品にすぎるが）だつたのだらうと思つてゐます。（奥）

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『實に口惜しいですね』

——農村婦人に與ふ（續き）——

山崎嶮路

小作人は、地主さんと町の商人とに利益を搾（しぼ）り取られ、自作農は、公課負担と町の商人とに甘い汁を吸ひ取られてしまふ爲めに、小作人も自作農も、質や量こそちがへ、やつぱりおなじやうな苦しみに壓しつけられて救濟の悲鳴を上げてゐる人だと言ふことを、私はさつきあなたに話してみました。あなたも、それには、一〃一つ肯定して下さいましたね。

けど、あなたはまだ、何にか解（げ）せないやうな事があると考へて居られはしないですか。

あなたが、本當に私のさつきおはなし致したことが解つたならば、きつと、もう一歩突込んで、

『ぢあ、何故地主や商人の爲めに、甘い汁の大半を搾り取られてしまふでせう』

と云ふ?を抱いて下さるにきまつて居ると思ひます。

そうです、そこです。誰れだつて夜の明け切らないうちから、星を頂いて起き出し野良に出たり養蠶をやる爲めに夜通し、眼を赤くして働らきつゞけたりして得た利益の多くを、商人や地主さんに取られてしまふなんて、實に殘念なことです。けど、殘念であるとないとにかゝはらず、事實は最も雄辯に、小作人や自作農の懐中から、その虎の子を奪つて行つてしまふのです。

『實に口惜しいですね』

あなたはそう思ひませんか。

『それは一体どうしたことなんでせう』

あなたは、その理由がはつきりしませんか。

多分それは、此のまへのやうに判りさうで解せないと云はれるでせう。ぢあ私が云つて見ますよ

『今の世の中では、凡てが所有者に都合がよく出來て居り、凡ての經濟行動の根本が、營利と云ふことを本質にしてゐるからなのです』

だから地主さんと云ふ田畠の所有者に都合がよく、營利を〆めるに都合のよい商品賣買の商人に利益が集中して行くと云ふことは、理の當然ぢありませんか。

商品生産と云ふことになると、工業などでは割合に都合がよく行つてゐるとあなたは思ひませんか。まあ、論よりも實際の事を私はあなたに話してみませう。

あなたがつい此の間まで働いて居たあの紡績工場などでは、ちやうど昨年一ヶ年の利益が、使用してゐる勞働者一人當りに割つて見ると、丁度、

五百六十六圓八十二錢五厘と云ふ多くさんな純利益を上げてゐるのです。これは、いろ〳〵の經費を全部引去つた殘りの純利益がですよ。けどあなたは一寸こんなことを思ふかも知れない。

『だつて、それは會社をやつてゐる人達は、工場だの機械だのと、色々なものを買つたり建てたりする爲にお金を出してゐるから――』と。

成程それはその通りです。けど、純利益金と云ふんですから、もちろんそれ等に對する利息やら償還金やらを差引いてゐるのですから、それらとは全然關係をもつてゐない利益なのです。

『つまりですね、假りに一万圓の資本を費して一万五千圓の商品を造り出したとします。そして、それから諸掛費用を差引いて純利益三千圓を得たとすると、一体その純利益は、誰れの力で產れ出てゐるのでせうか』

それからもう一つ、今度は商人の方を云つて見ますと、

『さつきの工業家から一万五千圓の商品を買ひ取つて、これを二万圓の御金に代へたとします。そして諸費用全部を差引いて、純利益金が三千圓有つたと致しませう、さあどうです、同じ品物から前への工業家に三千圓、後の商人に三千圓、都合六千圓の純利益を產み出したその商品は、一体誰れの所へ落ちついて行くでせうか――』

この例を一つの肥料屋の上に引いて見ますと、先きの會社が人造肥料會社と致しまして、後の商人を大きな肥料問屋だと云ふことに見て、話して見ると、良くわかるだらうと思います。

肥料製造會社の純利益は、その會社で、肥料を拵らへる爲め、始めから終りまでのいろ〳〵の勞働に從事した筋肉勞働者や精神勞働者の勞働力が

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

產み出したもので有るのです。つまり、資本家が勞働者の勞働力に對して、正當賃銀に達しない少額の賃銀しか仕拂はないで、餘剩になつた勞働力の積み重ねが、工業家の純益となるのだし、商人が得た純利益は、明かに消費者から取り上げる利益金なのです。いはゆる營利金なのです。そして最後の肥料消費者、所謂農業者は、工業家の手で一万圓の經費で出來上つた品物を、商人の手を經て二万圓といふ二倍の價格で買入れると云ふ具合になるのです。

そこで、まあそれは良いとして、今度はです、その二万圓の肥料を使用して農業生產品を造り出す農業者が、それに自分の勞力やら、田畠資本などを使用して、實費三万圓の農產品が出來たと致しませう。まあそこでゞす。

その人も、前の商工業者の得た樣な純利益を得られるかどうか。若し前二者の樣な利益が得られるならば何にも文句は云はないんです。けれど中々そう行かないんです。

下手にすると、却つて諸費用以下の捨値で賣らなければならないやうな破目になるのです。そうした商人本位の不安定な相場の波の上へに漂流して居る農產商品の製造屋たる農業者も、生產に要する肥料や農具等は、當然二重三重の純利益金をつけ加へられた値段のものを使つてゐること、いふまでもなしなのです。そしてそんな肥料や農具などの御金は、いつも春蠶の繭を賣つた御金とか秋の收獲後とか云ふ具合で買入れる爲めに、その間の利子やら何にやら含めたら、隨分と高價なものになるわけです。そして、それが自作農でゞも有つたならば、殘りの御金は、公課や税金に取り立てられるし、小作人だつたらば、收獲の五割以

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

上六、七割も地主さんに取り立てられてしまふんだから、全收穫に要した費用の全部が、小作納米を差引いた殘りの四割か、五割の品物の上にかゝつて來るのです。

だから、小作人の一石當り生產品と、自作農のそれと、それから田畠を所有してゐるだけの地主さんの一石當りの生產費とは、非常の差が有るわけです。地主は公課稅金だけでよし、自作農はそれに勞力及ひ諸費用が加算され、最後の小作人はそれの公課稅金を差引く代りに、全費用を全收入の四、五割の上に負担せしめられると云ふ、かういふ面白い具合になつてゐるのです。

あなたは、近頃ポツ／＼騷ぎ出されて來た農民運動といふものが、只單に小作人が、直接の搾取者である地主に對してする鬪爭であるのではあるけれど、本當の農民運動と云ふものは、それをも含めた、もつとより廣い意味の、總べて農民を搾取するに都合の良く出來てゐる現在の經濟組織に對して、根本から行なはれなければならないものであると云ふ結論に思ひ當ることゝ思ひます。

それで、そうした根本問題を摑んでゐない農民運動なり農村振興論なりは、全々その意味をなしてゐないもので有ると云ふことが出來るのです。

すると必然に、今の世の中に起つてゐる鑛工業勞働者の勞働運動と其の目的が合致して居り、又全プロレタリアーの解放運動と何等の相異がないことに氣がつかれることでせう。そうです、小作人や自作農が本當に今の樣な苦しい生活から解放せられやうとするには、どうしても、全プロレタリアー解放運動としてしつかりした握手をして進むことが一番に必要であり、又正しい事であるの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

です。
私は、自分が一番親しくしてゐる、そして自分と同じ生活の苦しみをしてゐるあなた達農村の婦人諸姉に、あなた達や私自身が、もつとより以上に今の世の中の苦を征服して、最も多數の人達の幸福を生み出さなければならぬと云ふことを思つて無遠慮に話しかけて見たのです。どうか私のこの平凡な言葉の中から何にか取り出して、そして弱いバラ／＼の小作人や自作農が一日も早く手と手を握り合つて、その上、今度は同じ苦を受けてゐる一般の勞働者の人達とも一緒になつて社會苦の征服戰に參加するやうあなたの御父さんなり、兄さんなり、夫なり、又は最愛の戀人なりに、內部から力添へしたり、時には陣頭にも立つたりして努力して貰い度いと思ふのです。又そうすることが、一番國の爲めにも、人類の爲めにも、必要であり、正しい事で有ると思ふのです。
どうぞ、弱い者達の團結の爲めに力を合せて下さい。そして、これこそ、あなたの社會に對する最も大きな義務であり權利であるのです。

（完）

私の宗教（小笠原誉至夫氏著）

『私は十數年前から（良友を作れ 良友となれ）といふことを私のモツトーとしてゐます。それは說明するまでもなく、自分のために良い友達を作り、人のために良い友達となれ、といふのである。』と冒頭に書いてゐられる如く、本書は、氏の人生觀の中から友人哲學とも云ふべきものを纏められたパンフレツトであります。
非賣 ですが、氏はその宗教を廣く世に傳へんために、求むる人には喜んで應ぜられます。

（東京牛込區新小川町二ノ九）
良友協會宛

報酬のこと（小説）

生田花世

『どうぞ報酬を下さいませ。先月分の報酬をいたゞいてゐない上に、また今月もいたゞかないので實に困つてをります。今日こそ今日こそと思つて社にまゐりますのに、來社なさいません。此間四谷見附でお見かけした時も、すぐむかうへ行つておしまひになりました。それでは實に困ります。どうぞそんな風に困らせないで、二ヶ月分の報酬を下さいませ。紳士として、信用ある×××社長としてのあなたならば、當然、この事は、なさつて下さるのが正當です。私は、食べて行けないから正當の要求として、報酬をいたゞいて、いろんなものを排ひ、生活費にいたさなくてはなりません。こんな事は賢明なる社長さまの御存じのない筈はないのですのに。くれ〲もお願ひ申します。どうぞ、報酬

を下さいますやうお取りはからひをねがひます』――

金拂ひのわるい社長河北あてに、かういふ意味の要求の手紙を出してから二三日して、けい子がその社のあるところ、丸の内のビルデング町に行つて見ると、もう貸事務室の紙がはられてゐる。『なるほど』と、かうは思つても、彼女の心の中はカッカッとする。引越して行つたところは西大久保とすぐ分つたので、その足で、電車にのつた。

いかにも四月はじめの温かい日で、かう、云ふに云へない野や、青空の戀しい春さきの事なので、金さへあればの嘆に、彼女はたえないのである。

西大久保に入つて、交番で訊いたり、蕎麥屋でたづねたりして、漸う〳〵其の家の所在が分つたので、けい子は練兵場の方へ歩いて行つた。

河北の家は、練兵場からの風でも砂埃でも、それを直接脊中に受けるやうな、とつつきの四軒並んだ同じ格好の二階家のまんなかの右で、そこに『河北』といふ新しい軒燈が見られた。

けい子が其の家の前に進んで行くと、隣になつてゐるまんなかの左の家には、門に『×××社』といふ看板がかゝつて、內側の玄關には、けい子が、毎日ビルテイングで見慣れたあの『□□□社』の札がかゝつてゐる。

けい子の胸は流石にどきどきするのであつた。もう大凡の事は豫想されてゐた。即ち報酬は多分貰はれまいといふ事である。然しけい子は、その金を貰ふ事がよし出來なくても、はつきりと、その貰

ふ事が出來ない事を突き留めやうとするその意識の方にヒステリカルな心を尖らせてゐるのである。どうしても河北に逢つて、幾度も幾度もの彼の留守や遁辭を、たつた一言でも詰問したいと思ふのであつた。そうして、もう二度と、こんな人間の集團の中に入つて來ないといふ決心をしようとしてゐた

けい子は入口の格子を開けて案內を乞ふた。すると直ぐ玄關の障子が開いて、見知りの顏がけい子の前ににやにやとしてゐた。それは年中半睡半眠を續けてゐるやうな、顏面皮膚のほどけかゝつた大野であつた。

『河北さんは?』

けい子がかういふと、

『ゐられますよ』

と間遠しい調子で、のろく云つた。

『お上りなさい』

と云つた。

けい子が上ると、疊は新しい、この六疊の埃だらけな片隅には、古い卓がすえられて、其上には、薄つぺらな刷物が數十部積まれてゐる。けい子が見るともなしにそれを見ると、選擧に關する印刷物で、一二頁めくると、反對派への漫罵や誹謗の文が滿載されてゐるのであつた。それは、明かに甲なる候補者に賴まれて、乙なる候補者の運動を阻害せんとするものであつた。

『相變らず、かういふ仕事をこんな處でやつてゐるのだナ？』
けい子は、心がおのづから河北をあはれみ卑しむのであつた。
大野の傍には片倉が營養不良の青い瘦せた顏をして、懷手をし、その隣には髭つ面の村山が居眠りをしてゐた。これらの人々―それから外にもう二人の女事務員は、何れも、河北からその報酬をどんなにしてでも貰はうとして、また、その爲にはどこまでも河北の意に屈從して、丁度、河北の身体へだにのやうに吸ひ付かうとしてゐる人々なのである。この人々はけい子が出てゐた時分から、もう何十日もの間、何らの事務もないのではあるが、丁度貸金の居催促をする人のやうに、かうしてしがみつき、欠伸をしたり、ころがつたり、話したり（と云つて氣の利いた話なぞはしない）笑つたりして、からきし意氣地もなく、かうして腐つた馬鈴薯のやうな、ぐうだらな日を送つてゐるのである。
けい子はこんなぐうだらな、だにのやうな人々の生活は、人事ながら不愉快でたまらなかつた。こんな廢頽的な人達を見るごとに、その人達の呼吸から、そんな怠けのバイキンが自分の方へも飛んで來て、口の中へ入つてしまひさうな氣もするのであつた。
『長安さんは？』
けい子はかう云つて、以前一緒に仕事をしてゐた婦人についてたづねた。
『あちらにゐます』
と大野は頤で、むかうの部屋を示した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

そこに入つて行くと、四つ五つの事務の卓が並んでゐて、ずつとむかうの床の間に近いところでは、河北の卓があつて、背廣を着た彼が、何かしきりに整理してゐる。目ざとい彼が、射るやうな眸で、けい子を見た時、けい子も亦彼を感じてすぐに目をそらしてゐた。二人は決して見合はさなかつた。入口に近いところの左には、河北の弟で、二年前まで士官學校にゐたといふ青年が、白つぽい袴をはいて、硬直な姿勢をして腰かけて、ペンで何かの寫しをしてゐた。

『ああ、いらつしやい』

と清人——さういふ名であつた——は理知的な若い男のもつ相手を威壓するやうな眼で、けい子を見て云つた。そしてその表情には、反抗のやうな輕侮するやうな複雜な笑がまじつてゐた。

『まあ崎田さん、お久しぶりね』

右側にゐた長安が、清人に挨拶をするけい子の横からからう聲をかけた。けい子はすぐ向き直つて、

『長安さん、おかはりもなくて結構でしたわね』

と、けい子はその傍らに近寄つて云つた。

『まあ、おかけなさいな』

と長安は、隣の椅子を引いて云つた。けれどもけい子は、入つた時からその心の注視をこちらの方に凝らしてゐると思はれる河北の方に挨拶にと近寄つて行つた。

『御無沙汰をいたしました』

『あゝ崎田さんでしたか?』

河北はかう云つて、けい子が見上げる眼をはづして、一度も視線の合はぬやうにとするために白々しい面をまつすぐにした。そして空間を見てゐるのである。

けい子は默つて立つてゐると、

『崎田さん、先日はお手紙をどうも有難う…隨分猛烈に書いてあつたので、私はすつかり感情を惡くしましたよ』と云つた。

『…………………』

けい子は何ともつかずお辭儀をして、其の前を退いた。さうして、それは本能的な戰鬪準備のためかもしれなかつた。

けい子は長安いそ子の傍の椅子に腰をかけた。いつ見ても貧血症の青い顏の持主長安いそ子は、東北といふばかりで、その生れたところはよくはけい子には話さなかつたが、目白の女子大學に一年ばかりゐた事もあつたといふ、今から四五年前早稻田に一二年通つてゐた事のある男――その男は九洲の生れであつた――と戀愛に落ちて、親達の承諾を求める頃にはもう、いそ子にはお腹には子供があつた。そしてかうした自由結婚の結果として、二人は何等の補助もその親の方からはあたへられぬ心細い新婚の生活に入つた。もつとも、はじめは男の方が新聞社に入りよく働いたので、いそ子は結局親達の干渉をさけたかういふ自由な夫婦の生活が嬉しかつたが、二人目の女の兒が生れてから、夫が

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

病氣となり、極度の欠乏におそはれて了ひ、いろ〳〵の職業をさがしてあるいてのはて、この×××社に入社したが、入社したその月から、社長はけい子同樣、金を渡さないのであるから、いかにくるしんでゐる事であらうと思ひやられるのである。

社長はいつまでたつても。陰險な顏をして押し默つてゐる。とう〳〵彼女はかう思つた。ゑい、こちらから出て行つてやらうと、そこでづか〳〵と、社長の方に行つた。社長はそは〳〵して、書けも出來ない心を、てれかくしにペンにかこつけてゐる。何かの文案の題を半ば書きかけてゐる。

『御都合がおよろしくば、一寸申し上げたい事があります』

『はい、云つて下さい』

『………』そのペンを置くがよい、とけい子は思つた。人の話を聞くのに、書き乍ら聞く者があるか癪にさわつて仕方がない。そのペンの先を見つめ乍ら彼女は立ちすくんだ。

『……:』社長も默つてゐる。

『………』彼女もだまつてゐる。

事務室の方では咳をする聲がする。けい子はぢれつたくなつた。

『十五日に來いとお云ひになつたので、參りましたらおいでになりませんでした、あの日四ッ谷見附でお目に掛つたのですが、直ぐ向ふに横切つておしまひになつたので、お話しが出來ませんでした。それであの手紙を出したのでございましたが……今日は如何でございませう。月末でございますから』

と云つた。

『然し、それよりも貴女は、私になぜあのやうな失禮な手紙を出しましたか……人に向つてあんな無禮なことを云つて濟むと思つてゐるのですか』

ペンを置いた社長のきつい目が、かなりつり上つた。

『私はあれが失禮とも無禮とも思ひません、あの請求は正當だと思ひますから………』

『さう思ふならしかたがない。しかしあのやうな手紙を書くのは貴女のために不爲なのだぞ……それに……』

『いえ、私はさうは思ひません。手紙の事や、その他の事は今私は申したいとも、聞きたいとも思ひません。私は頂けるなら、報酬を頂きたいと思ひます。それだけの用です。』

『やらぬとは言はないぞ！みそかまで待つて居ればいいのだ。何故待たないのだ。え、何故待たないであんな手紙をよこしたのだ』

言葉が引き吊つて來た。

『だから待ちました。先々月のを三十日まで待ちました。更に今日も三十一日ではありませんか。待つてをりました。十五日に頂けませんでしたから、今日頂きに來ました。いただけるならいたゞく…さう出來ないなら…』

とけい子は口をむすんだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

『さう出來ないなら……』と河北が言つた。
『十五日に來いとあれ程お言ひになるならば、責任のあるお言葉だらうと思ひました。それに、お見えになりませんでした』とけい子は言葉をそらした。すると河北は、
『私のゐる時に何故來なかつたのだ』と、むつつりこちらに白い目を向けて『あなたに、さうついてをるわけにはゆかないよ』といふ。そのこしを押へて、
『けれど十五日に待ちましたのにお出でが無かつたぢやありませんか。私も借金もあるし、色々困つてゐる事もご存じでゐらつしやる筈でございます。どうぞ今日戴きたうございます』と、はつきりと言つた。とバネのやうにはぢつけて來た河北が、
『それなら、何故人に向つて、あんな手紙を書いたかァ……この生意氣な女！』と叫んだ。そして腕をわな／＼させて怒聲を齒の間からあげた。伸び上つた彼女の神經はサア……サアと鋭く頭に旋回した。彼女は障子の方に身を引いて、指を障子の棧に掛けて、およびかゝる川北の顏をぢつと見た。にらんだ細いその顏には、血がいまぼつ／＼勇躍してゐる。白い目が蛇のやうにぎら／＼してゐる。この男には、今や猛獸の本性が勃發したぞ！　虎ががり／＼と檻の鉄格子を引つかかうずの血相、その物々しさ……　彼女は彼女自身の心が、ふつくりと水の上に浮くやうな物の輕い響を感じ乍らかう思ひ）
『この上あなたのやうなヴアルガアな人とは、何もお話に致しますまいよ。もういいんですの。なん

の金はいらんのですよ。もう請求はしませんわ。皆なあなたへ上げるんだから……』
から云つてついとそこを出た。一瀉千里の速力だ。『私、失禮いたしますわ、さよなら』といそ子に云つた。

コートを着た。ショールを卷いた。風呂敷をもつた。下駄をはいた。外に出やうとすると、いそ子があとから追つて來て言つた。

『喧嘩してはつまりませんわ。ね、辛抱なさらなくては……』と云ふ。その不安さうな、おど／＼してゐる目の痛ましさ。『可愛さうないそ子さん……』彼女は目でゑしやくを返して外に出た。彼女の心はその時緊張せられるだけ緊張してゐるので、非常に輕々と道を歩いて行く。足と心が此の際とんぼ返りをする。

昂奮して居るには違ひないが、彼女自身はさうは思はない。唯、水の上を或一点に向つてぷか／＼と浮流して行くやうだ。そして思はず微笑む。『埒が明いた。きまりがついた』それと同時に自嘲も感ずる。『さうだ、一寸馬鹿げてゐる……』

その夜。けい子は夜中に頭を上げて見た。痛い！チク／＼と旋回するやうな痛味がある。血管の太さに比して通り拔けようとする多量の血粒が押かけるので、一しきりの痛みを感ずる。手を額と顳顬に當てて熱いかと思つたが、却つて表面はあつくはなかつた。あの時、川北の血相顔を凝視したあの時スイーッ／＼と冷つこい樣な神經が頭で旋回する心持がした。それを思ひ出す。あの旋回の心持のし

た時、多量の血液がだく〳〵と頭に湧き上つた！と彼女は目を閉ぢてその血液の活動を描いて見た。血管が、危く破られまいとして張り切つてゐる。次第に今よりも甚だしく激昂して、或はぱらりと血管が破れて、血のあふれる死が來そうな血のはち切れを感ずる…………

痛みは益々ハチ〳〵とする。頭の中央をきりでギリ〳〵突き徹す樣に痛みが直下する。忍んで、その痛みをなでるやうにして布團を顏に當てた。彼女は水と思つた。水で冷やさうと思つたが、目を開けるとマッチが無い。暗い……しんとしてゐる……どうしようかなアと思つて彼女は寢返りをして見た。と、障子を越して雨戸の隙からさして來る薄明りが、彼女の目に傳はつた。彼女は浮み上るやうな姿で動いた。手を伸ばして寢乍ら一枚の戸を押明けると、青く爽然とした光の夜が彼女の目に映つた。貫きたゞらかすやうな痛みが、そつと傍へに押退けられた樣に思つたのは、月の光を迎へた情感が、痛みと相剋んで力强かつたからであつた。冷やりと、風と云ふよりも、そゞろに流れる夜の空氣がひたひを流れた。彼女の心は明瞭と天心に直線をなげた。其處に下弦の月が空に引掛つた樣に見える。月暈の色合がほんのりして、和らかい調子のあるのは、もう四月の始め頃であるからの和みであらう。

然し、見てゐる中に月をにらめてゐた白いむく〳〵とした段々雲が、伸し掛つて光を腹中におさめてしまつた。そして元からの白さが、底からの光で、澄んで明るく白々と輝く。

『のまれちやつた』と彼女は獨り叫いた。奪はれた月の代りに、今度の焦点は、ナカ〳〵と微光を放

つ。見入れば見入るほど、鋭く光る一つの星であつた。神經のチカ〳〵ふるへる女の眼の樣だ。純だけれども狹量で、一直線に走つて行く女の魂を見る樣だ。ぢつと眺めてゐると、チカ〳〵と光る强弱といふものが、彼女の心の打震ふ强弱を連なつて、更に頭の底をハチ〳〵搏つ。星の光が血の響と手をつなぐ。

然し、いくらか堪へ易くなつた。……雲…雲…雲の尖が……と心がいら〳〵して云つた。雲は伸びてゆく。黑鬼の手のやうな一擴がりが、はッと思ふ間もなく、星の顏をなすつた。なすられたけれども、星はまだチカ〳〵と光つて、ベエエル越しの顏を彼女の瞳に見せた。光は矢張り、夢よ、幻よとチカ〳〵してゐる。ああその微光…淡いけれども力强い、鋭い微光…『ああ、可哀さうないそ子さん……いそ子さんのやうな星……』と獨りごつた彼女の眼には、ぐつと大粒の涙が浮んだ。

五年の後のことである。

けい子はその勤め先、Y新聞社で、はつたり廊下で、川北にあつた、けい子はおじぎをした。川北は寂しくニヤリとして、『ちとお遊びに來て下さい』といつて、名刺を出した。ニコリとして、けい子はいつた。『いづれ、そのうちにお伺ひいたしたいと存じます』そして貧しさうな川北の後姿を見送つて彼女の感じたものは、『世にもすまない心』ではなかつたか！

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

△編輯室にて▽

長い　ぶさたになりました。

私が旅に出てから、もう五十余日、その間に方々から送られて來た手紙が、今、机の上に乱雑に山と積まれて、待ちくたびれた者のやうにアクビをしてゐます。留守中に訪れて下さつた方々の名刺だけでも、大　多いのに、みんなそれぞれの用事があつたのだらうに、と思ふと、むしやうに、せか／＼して來て、ぢつとしてはゐられぬやうな氣持に驅りたてられます。歸つて來てよかつた、さあ働かう。こんな風　氣待で、今、私はゐるのです。

○

今、私のそばには、坊やがゐない。いつも相談相手にしてゐた父チャンがゐない。それに、私の片腕となつて手傳つてゐて下さつたＴさんもゐず、Ｍさんも差支へて來られぬといふ知らせ　齒、抜けたやうな淋しさの中で、Ｓさんと二人で、一切合切の整理と、六、七月號の編輯や印刷の用務を急いでゐるところです。獨りボッチの紀伊チャンが、ヨチ／＼とおぼつかない足どりで、そこいらあたりを掻き亂してゐる姿が、せめてもの慰めでおります。

○

九州の旅の終へやらぬ内からキトクの知らせをうけてゐた母の病氣を、私は一日もはやく大体の用事を整理したあとで、もう一度紀伊新宮まで見舞にやつて頂きたいと希つてゐます。

いふまでもなく、私は一層いゝ雜誌として『婦人と勞働』を發行するために急いでゐます——私は休刊したくないのです。無理だけれど、六、七兩月號を今月内に必ず仕上げて、而も、發行日のおくれたのをも取返してしまいたいのです。

私の歸　を待ちかねて、いろんな相談を持込んで下さつた方も少くありません。微力なれど、少しでもお役になつたら何よりの幸です、世の中で、たつた一人のためにでも、自分の存在が役に立つた、と考へられる時、誰でも一番に生きてゐることを感謝出來るのではありますまいか。まして自分の仕事が、一人でもの人に力をあたへ、喜びを與へうるのだとしたら——

○

今や、不景氣のどん底にあると人々は云ひます。普　雜誌とは類を異にしたかういふ雜誌の維持も、益々困難になるばかりのこの際に、かうして着々私たちの仕事を進めて行かれてゐることは、感激に堪えないことであります。（おく）

七月號今月末發行！

前納誌代

一部　二十五錢　郵税五厘
半年分（郵税共）一圓四十錢
一年分（郵税共）二圓八十錢

送金法

誌代は必ず前金の事
送金は振替で願ひます
誌代の受取證は別に出しません。雜誌發送を以てこれに代へます

大正十四年五月三十一日印刷納本
大正十四年六月一日發行

發行編輯兼印刷人　奥むめお　東京市外巣鴨町一〇一九

印刷所　香柏社印刷所　東京市外西巣鴨町六六〇　電話小石川五一八四番

發行所　職業婦人社　東京市外巣鴨町一〇一九　振替東京六四一六〇番

米國理學博士　久布白督次郎氏　發明製造

食餌療法研究の結晶

科學的新進製造法

科學的新進製方の美味にて有効の

榮養パン

この商標御改め

滋味にて病弱者に適す

日本人の体質に好適

美味滋養廉價薬用

プロへの福音…榮養パンに就て

吾々勞働婦人が食事に就いて時間と勞力と經濟との上に多くの苦痛を感ずる時、之が解決法として、躊躇なく私は、少く共一食を營養パンでおすましなさいと申上げませう。敢えて、自分がパン好きであるための我田引水でもなく、パンやさんへの提灯持でもない。私は先日東京營養試驗所に久布白博士を訪問した時、さながら、研究室のやうな一室に、白い上衣を召した博士の前にあるパンを眺めて、失禮をも顧みる暇なく殊更念人に『これで普通の大人一食分の營養は十分なのですか』ときかずにはゐられませんでした。粿、それ程一食分は少量にみえました。學者らしい顔に深い自信の輝きをあらはしてゐらつしやる博士の『さうです』といふ簡單なお返事で私には十分でした。私は有難いと思ひました。助かると思ひました。

實に、吾々プロに一食の十分な營養分を與へるパンはたつた拾錢なんです。重量と容積の大きい食事をしつけた私共の胃に、はじめは甚だ物足りなさを感じさせますが、さうして胃擴張や胃下垂から救ひ、更に食後の倦怠から早く連れ出してくれるのです、何故なら胃に集る血が早く役目をすませますから。

營養パンは軟性と堅燒との二種に製造されてゐます。前者は軟いのを好む人に適し、後者は保存に堪へるから地方向きです。後者は堅くする爲めに糠分が多く入るさうですから、むしろ薬子パンとしていゝやうです。子供のおやつには最も適してゐませう。薄いのが三枚で一日分です、私達は今や安心して營養に富み、而も廉價な食事を持つ事が出來るのを博士に感謝致します。（宮本冬）

製造元　東京營養試驗所（東京神田花房町中町通）

發賣元　山崎帝國堂食品部（東京神田万世橋電車停留場前）

特約店至急御申込あれ規定書送る

小川未明選集

豫約募集

▲**內容**――著者が初めて日本の文壇に權威を示したる新ロマンチシズム時代より、中頃人道主義時代を經て更に最近社會主義時代に至るまで、前後二十餘年間に亙る苦心の創作、童話、小品約一千八百篇のうちより、最も代表的なる傑作、秀作・著者會心の作二百三十篇を抜き取り、更に文壇の權威たる吉江喬松、中村吉藏、藤森成吉、秋田雨雀、平林初之輔五氏の嚴選を經て全六卷に收輯す。

◉**申込期日**――九月十五日限り

▲**體裁**――四六判總布製天金美本、表紙及び見返しの意匠は平福百穗畫伯の創意に成り、更に著者獨特の趣味を加味して瀟洒、芳醇、清新の美を極む。

▲**刊行**――全六卷とし、大正十四年九月第一卷刊行、引續き毎月壹冊づゝ刊行し、向う六ケ月を以て正確に完結せしむ。

▲**頒布**――豫定部數を三千部とし、豫約者に限り頒布す。斷じて選擇分賣の需めに應ぜざるは勿論、締切期日內と雖も豫定部數に達したる時は申込を謝絶す。

▲**申込**――豫約申込金は**三圓**とす。申込金は申込と同時に、或は五日以內に必ず送金の事。五日以內に送金なき時は申込を取消す。

▲**會費**――全額金十九圓二十錢。毎月五日限り金三圓二十錢づゝ五ケ月間御拂込の事。申込金は最終月の會費に充當す。

▲**一時拂**――全額拂込に限り金**十八圓**に割引す。

▲**期日**――申込は**九月十五日**限り、會費拂込は九月二十日限り。

▲**送料**――會費拂込の際左の送料を加算されたし。（壹冊に付市內十五錢。內地三十錢。滿鮮臺灣五十八錢。）

內容見本進呈

株式會社 **文化學會出版部**

東京小石川小日向臺町　振替東京七二八〇

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

安部磯雄・山川均・堺利彦三先生共編

社會問題叢書

四六判二百頁内外上製函入定價各冊壹圓均一送料八錢

- 第一篇 現代社會生活の不安と疑問（十版） 堺利彦著
- 第二篇 勞農露西亞の勞働（五版） 山川均著
- 第三篇 日本勞働運動發達史（四版） 赤松克麿著
- 第四篇 無産階級の世界史（五版） 上田茂樹著
- 第五篇 産兒制限の理論と實際（新刊） 安部磯雄著
- 第六篇 資本主義と戰爭（新刊） 松下芳男著
- 第　篇 自由戀愛と社會主義（最新刊） 守田有秋著
- 第八篇 婦人問題と婦人運動（近刊） 山川菊榮著

東京市小石川區小日向臺町二ノ一九 **文化學會出版部** 振替口座東京七二八〇番

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

大正十三年十一月十二日第三種郵便物認可
大正十四年五月三十一日印刷納本
大正十四年六月一日發行

婦人と勞働

第三卷
第五號

【定價二十五錢】

東京銀座
松屋呉服店

電話銀座
72 2394
87 2395
88 6572
89 6573
2893 6574

階	賣場	賣場
屋上	展望	展望
八階	事務室	事務室
七階	事務室	事務室
六階	大食堂 喫煙室	催物場 展覽會場
五階	和洋家具 漆器類 陶器類 和洋食器 婦人子供室	文房具 書籍 玩具 運動具 樂器
四階	美術工藝品 貴金屬 裝飾品 袋物手藝品 喫煙室	ハンカチーフ タオル 兒供用品 子供洋服 洋服
三階	浴衣地 生地物 絹綿交織 實用切 綿布織物 特別室	綿帶地類 既成品 夜具地 帛紗 風呂敷 特價品
二階	白生地模様 帯地類 御召友禪 呉服小物 休憩室	實用切 高等着尺 銘仙類 呉服細工
一階	メリヤス 毛布膝掛 化粧用品 洋品雜貨	ショール 洋傘 帽子靴鞄 雜品煙草 履物傘 商品切手
地階	菓子 切花 銘茶鰹節 喫茶部 エスカレーター	罐詰 海産物 酒類 果物

エレベーター

復刻版 婦人運動 第1回配本
（第1巻〜第5巻）
〈原題『婦人と労働』〉
1990年6月25日　発行
本体揃価格　50,000円
発行者　船橋　治
発行所　不二出版
東京都文京区向丘1-2-12
〒113 ☎03（812）4433
印刷所　三進社
製本所　吉田製本工房
中性紙使用
乱丁・落丁はお取り替えいたします。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN